庭園と化した「おふでさき」―「事」と「石」―

前おやさと研究所長
井上　昭夫　*Akio Inoue*

さて、「世界」の「国中」(『治療文化論―精神医学的再構築の試み』中井久夫）にある大和神社の分霊は、第二次世界大戦末期に悲劇的最後をとげた戦艦大和に、その名にちなんで奉祀されていた。大和を「おおやまと」と読むが、これは養老律令(718 年）が初出で、それ以前は大倭と書き、倭は大陸側が我が国に対して用いた名称である。369 年に百済王が贈ったものといわれる石上神宮の国宝七支刀にも「倭王」の漢語がみられる。『日本書紀』という書物の名前などで、倭から大和、そして現代の日本という国名が対外的な誇りと国内統一の上から定着した。大和神社の御由緒書には氏子の中に天理教教祖の中山みきがいると書いてあるという（米山俊直)。柳本の西三味田にあるこの大和神社の北側に母きぬの長女として誕生したみきの生家が、当時のままに保存されている。前川家は藤堂藩主から無足人に列せられて名字帯刀を許された大庄屋で、大和神社の巫女をつとめた家柄でもあった。立教の加持祈祷に立った教祖中山みきは、成るべくして成られたコズモロジカルな原理にそう地勢学的な魂の因縁をもった土俗的な女性でもあったのである。

その不思議なことが起こったのは、あるからりと晴れわたった春の日のことであった。いつものように拙宅の朝づとめにつづいて、神棚から「おふでさき」をひきよせ、それをおもむろに「み」ひらいたとき、幻覚か白昼夢かその「み」ひらいた２頁分が一面の庭園に見えてきたのである。

「おふでさき」はいうまでもなく、主として平仮名でかかれているが、なかには神、月日、心、木、山といった漢字が原文どおりに印刷してあるのもある。しかし「こと」だけは、一貫して漢字の「事」と草書崩し字の原文「こと」とは異なった書きあらわし方となっている。「おふでさき」全 1,711 首のうち、実に 776 回も「こと」が「事」として漢字化されてあらわれている（例外が一首だけあるが、この是非については後ほど議論する)。「こと」を「 」と漢字化するのならば、「 」もすべきではないのか、という素朴な言語学的疑問よりもさきに、庭園には似つかわしくない奇石が、再作庭（「おふでさき」原文表記編集）にさいして、1,711 首の連歌からなる名園『おふでさき』(昭和３年初版、昭和 27 年初版）に不用意に配石されているような感じがしだしたのである。

そこで一翻訳者として「こと」と「もの」の訳出に悩まされた、半世紀まえからの雑念があれこれとおもいだされてきた。毎朝夕ひらきみる「おふでさき」に頻出する「事」という一漢字の占める塊が、美しいひらかな空間の庭の白い砂地に、無造作に投げ出されているような感覚におそわれ、その存在（あること）が気になりだしたのである。なぜ「こと」だけが漢字化されたのか、それは正しい選択肢であったのかという作庭的印象から触発された美的・言語学的疑問が本論考執筆の火付け役となった。

しかし、「こと」と「もの」というやまとことばの意味の領域には、「ある」ということばにくわえて、維新前後とくに欧米から近代化とともにやってきた言語の訳語選択に関する実在論や唯名論、そして精神論をまきこんだ日本語による哲学の難問中の難問がある。その先駆者である本居宣長や和辻哲郎をはじめとする関係諸資料をあさるなか、とてもわたくしのような素人の手におえるものではないと勉強は途中であきらめていたのであった。

最近さらに、古代庭園に関心をもちはじめたゆえか、造園図鑑などをひっぱりだして、庭仕事で大小の庭石の並びを腰をのばしては眺め、わたくしなりに納得のゆく位置におきかえならびかえているうちに椎間板ヘルニアになり、その這いずりまわりもできないような半死半生の激痛感に、はじめて立教の元一日の直接的原因としてあった中山みき教祖の腰痛の痛みを、この歳になってはずかしながら万分の一くらいは体験させていただくこととなった。痛いということばを知っているのと体験する距離は無限に遠いことをこれほど感じた痛みは経験したことがなかった痛みだったからである。

天理教立教の肉体的原因は教祖の腰の痛みからである。痛みは言葉ではけっして正確には伝わらない。にもかかわらず、わたくしは立教の元一日についての読み書き話は数えきれないほどもしていただろうと思うと、とりかえしがつかない不甲斐なさで不眠症と脳梗塞ストレス症候群がさらにひどくなった。ドライマウスとドライアイ、くわえて右の足痛が加わり、2013 年 10 月 26 日の立教の日には､痛みは決定的に合図立て合って、天理教立教の三大因縁のすべてが、わたくしの身体（かし「もの」・かり「もの」）の中で、神の「予定調和」の線上にみごとに出揃ったのであった。

しつこい痛みは医師が診断し処方してくれた鎮痛剤でも全く効果がない。このストレスが原因であったのか、今度はからだの冷えが足元から上半身に移行してきた。電気毛布で就寝しても汗をかきながら震えている。確実に自律神経失調症の典型的な症状である。いろいろ神の手引きを反芻するなか、「事」という漢字が、さざ波のような「ひらかな」の砂地の中に、無造作につきでている感じがする「おふでさき」の各頁の光景がふたたび気になりだした。石化した「事」が津波のようになって押し寄せてくる夢。まさに狂気の沙汰とはこのような精神異常のさまをいうのであろう。

「事」の「石」が精神の椎間板ヘルニアに見立てられるようにもなり、外気にあたるたびにストレスは増幅するばかりとなった。絶体絶命の境地とはこのような場面をさしていうのであろう。人間が死というものに直面したとき、どんなに心身がたぎり立ち、たけり狂うものかという境地にまでいかなかったのはまったく信仰のおかげといまではおもっている。そのとき突然「手引きはすんだが、ためしはまだすんでない」という意味の『稿本天理教教祖伝逸話篇』の教祖のことばをおもいだした。そこで「おふでさき」諸英語訳と、原本変体ひらかな版、諸ローマ字訳などを本棚からとりだし、いったんあつめておいた「こと」と「もの」の言語学・哲学的関係諸文献に目を通さざるをえないこととなったのである。

ところがわたくしは、アメリカ留学時代（1955 ～ 1959）に芥川龍之介の『或る阿呆の一生』にはじまる数編の遺作集や、帰国後「みかぐらうた」や「おふでさき」など天理教関係の原典や若干の教学論考の英語訳を自己流の翻訳論をふまえてこころみた悪戦苦闘の翻訳経験はあるが、専門の言語学者でも哲学者でもない。だからといって、疑問をそのままにしておくと、

ストレスがたまるばかりである。そのストレスと戦い、あるいは逃避・超越するためにも、我が死を前にして突きつけられたこの難問に挑戦してみようという尋常でない心機一転ともいえる決意をした次第なのである。

そこでふと気になりだしたのは、『我が心は石にあらず』という高橋和巳の代表作品の一つとして知られる小説のタイトルにある「石」の意味であった。もちろんその作品の基底的テーマは『邪宗門』もおなじで、吉本隆明の『共同幻想論』にも通底している諸点がある。『我が心は石にあらず』の第一章の右頁の裏表紙には、そのことばの出典が詩経から引用されている。

我が心は石にあらねば、転ばすべからざるなり。
我が心は席（むしろ）にあらねば、巻くべからざるなり。
――詩経・邶風――

このような次第で、右をみても左をみても「事」と化した不思議なわが家の庭の「石」神は、毎朝庭に出て深呼吸するわたくしのこころにむかって、ぢば定めがおこなわれた明治８年６月御執筆第 11 号１番の「胸先へきびしく問(つか)え来(きた)るなら　月日の心急き込みである」と詠われたあの「おふでさき」の実存的な、まさに象徴的実存主義の棘そのものを肉体に突き刺す和歌一首を伴い、何かあらたな意味を痛みから見いだせとせまるようになったのである。そのような解釈の思想的背景を簡潔に一言でいえば、学生時代に読み影響を受けたキルケゴール（1813 ～ 1855）の一生を貫いた「わが肉中の棘」(The course of my life is set—with a thorn in the flesh—to achieve what was beyond my dreams. ...）にはじまるかれの 1847 年の日記の一節 670 にある有名なことばであった。ちょうど天理教祖が 50 歳のころに記されたものである。

高橋和巳の『我が心は石にあらず』の主人公〈私〉は、精密機械技師であるが、過去において第二次世界大戦に学徒出陣したその生きのこりであり、戦争末期において〈死の操縦〉を学んだ〈私〉である。この二つの〈私〉を語り口として、さまざまな事象が企業組織をめぐって展開し、思索がかわされる。たとえば主人公は次のように述懐する。

事実、時代は大きく展開しつつあった。戦後の自由主義教育を受けた青年たちが、組合一つない企業に進んで入社したがるはずはないのだ。そして、せっぱ詰まった企業家たちは、この地域連絡協議会の〈微力〉さに着眼した。自由連合主義がどういうものかについての正確な理解もないままに、企業家たちが本能的に恐怖するマルクス主義とはやや形態を異にするらしいという単純な認定から、そういう方針を打ちだしたに違いなかった。そして、その頃から、既成の大組織や革命的党派からの糾弾とは別に、私自身は、初期の情熱を失いはじめたのだ。

人はしばしば、その秘め思う意図と（思われ）とのギャップに悩まねばならぬことがある。政治的にはそのギャップがかえって自己に幸いするなら、渡りに船と利用すべきだろう。事実、私はそうした。私たちの組織は、じっとしていても膨張しはじめ、私の組合運動面での地位は不動のものとなった。だが、その時、私の情熱は惨めに崩れはじめたのを、私自身は、ごまかしようもなく知っている。

戦争中、飛行機の操縦の訓練を受けていたものの中で、いまも操縦士であるものはいない。それは航空時間が乏しく、操縦技術においておとるからだけではない。一つの意図のもとに習得したその同じ技術を、他の目的に転用することは、別の職種に転ずることよりも心理的により困難だからだ。私の組合運動は途中で、その目的が変わってしまったのだ。違う、違うと内心で呟きつづけながら…。

このなかで述べられる主人公の〈私〉と組織生成との関係性のなかには、それが国家、政治、企業だけではなく、時代に変革を余儀なくされるいかなる宗教・文化組織にも類似して生起する心理的経緯や矛盾が象徴的にかたられている。もう一人の〈わたくし〉をパラレルにその流れのなかに放りこんでみると、作者の意図が別の方角からもみえてくるのであった。

以上のような理由から、本論の「おふでさき」における「こと」と「もの」というテーマをあつかうにさいして、心情的に「石」に免じて、天理修行といささかなりとも因縁があってうまれたと信じる天才的作家高橋和巳が彼のいのちをかけてたたかった実践思想を、本居宣長、和辻哲郎、吉本隆明等々の巨大文人思想家たちにすこしでも重複させ、主として「おふでさき」の美しい連歌リズムに心魂をあそばせ、やまとことばを中心に天理思想構築の新鮮な視界抽出の可能性をもとめ、次世代にむけて学際的かつグローカルな思索展開の種まきがお互いにできないかとの庭いじり的執念が、拙論執筆の動機を後押ししてくれたのであった。詩経にある「我が心石にあらず」ではなく、「我が心は石である」という断定的逆説がここに誕生の産声をあげたようである。

ちなみに、数十万年前の氷河時代に洞窟にくらしていた人類が最初に発声した言葉が「ＳＨＩＨ」（石）であり、以後Ｓ音だけは保存されて人類共通語として世界各地に伝えられ変化していったという。このことを統計学手法によって世界の言語を分類した、旅順工科大学の機械科を卒業した井上赳夫という研究者が『世界古代文明の謎』（大陸書房）という注目すべき書物を書いている。物理学者の寺田寅彦は「人類の言語の共通性は人間集団の大移動を意味するものである」と理解し、たとえば世界中の火山の名前には類似したものが多いという点に着目して、「アソ・アサマ型」、「ツルミ・タラ型」、「コマ・カンプ型」、「クジュウ・フジ型」、および「イオウ型」の５種類があるということを統計学手法によって分類している。一方、世界の言葉の音には、一定の意味のある原則があると主張する津田元一郎は『日本語はどこから来たか』（人文書院）において、音義の世界的言語の共通性の一例として、原人が最初の「道具」である「石」をつかみ、木の実を割って食べた時に感動をこめて発した「ＳＨＩＨ」という音声は、その後人類共通言語として世界に伝えられ、さまざまに変化していくが「Ｓ音」だけは保留されていると述べている。日本語の「ＩＳＨＩ」、英語の「ＳＴＯＮＥ」、ドイツ語の「ＳＴＥＩＮ」、ギリシャ語の「ＳＴＥＩ」など数多くの類似した諸例を挙げているが、言語音韻論と天理教語については、稿を改めて連載の中で私説を展開してみたい。